

メンタルクリニックにおいて 半夏厚朴湯を含む漢方薬が著効した4症例

はしもとメンタルクリニック(福岡県) 橋本 崇史

精神科領域において、抗不安薬やSSRIが第一選択となる疾患は多い。一方で、向精神薬に対して抵抗感を示す患者は一定数存在する。今回、向精神薬に対して抵抗感を示した患者の不安症状や喉のつまり感に対し、半夏厚朴湯をはじめとした漢方薬を投与し著効した4症例を経験したので報告する。

Keywords 不安、喉のつまり感、半夏厚朴湯、五苓散、柴朴湯

はじめに

パニック障害やうつ病などの精神科疾患では、抗不安薬やSSRIなどが第一選択となる。一方、インターネットやSNSの普及などで、その危険性のみを論じた文章が患者自身の目に触れる機会が増えてきている。それにより向精神薬に対して忌避感を感じる患者も増加し、治療指針の決定に難渋することも多い。一方、患者に漢方薬を処方する場合はあまり抵抗感なく受け入れられることが多い。

今回、西洋薬に忌避感を示した患者に対して、半夏厚朴湯をはじめとした漢方薬を投与し著効した症例を経験したので提示する。

症例1 37歳 女性

【主 訴】 パニック発作(動悸、息苦しさ、喉のつまり感、血の気が引く感覚など)、予期不安、広場恐怖、回避行動

【病歴・経過】 X-2年頃から地下鉄に苦手意識を持っていたが、X-1年1月に通勤で利用していた地下鉄の車内で激しい動悸を自覚したことから以降はバス通勤に切り替えた。しかし、同年11~12月頃からはバスに乗ることもできなくなり、自転車での長距離通勤を余儀なくされた。

X年1月頃からは改装工事中だった勤務先の入居するビルに入る時やエレベーターに乗る時、人が多く集まる場所に身を置く時などに不安が増強し、その都度動悸や息苦しさを自覚するという傾向がしばらく続いていたことから4月に当院初診となった。

経過と症状からパニック障害と診断しSSRIを主剤とする薬物療法を提案したが、本人の抵抗感が強かったため不安症状軽減の目的で半夏厚朴湯エキス細粒6g/日を処方し

治療を開始した。

治療開始以降は喉のつまり感を自覚することなく経過していたが、5月の診察では動悸や息苦しさ、血の気が引く感覚などを自覚することなくバスや電車に乗ることができたとの報告があり、9月には軽度の予期不安が存在するものの閉塞的な環境(エレベーター、人が多く集まる場所など)でも動悸や息苦しさをきたすことがなくなったとの報告を受けるに至った。

症例2 61歳 女性

【主 訴】 天候不良時に生じる倦怠感や頭痛、労作時息切れ、動悸、焦燥

【病歴・経過】 看護師として約38年間にわたり意欲的に業務に従事していたが、腓リンパ粘膜腫瘍に罹患していることが判明したため、X年2月に手術を受け1ヵ月半後に退院した。

退院後は早期復職に向けて能動的な生活を送り、同年5月に復職したものの労作時息切れや動悸をきたしやすく、曇天時や雨天時は全身倦怠感や頭痛を自覚することが多かった。また、6月上旬には息切れが増悪して過呼吸に至ったことから勤務先で身体検査を行うも異常は認められず、本人なりに様々な対処法を試みるも効果を実感するには至らなかったこと、「早く調子を整えたい」という焦燥感が募ったことから7月に当院初診となった。

向精神薬の使用に若干の不安を表出していたことから労作時息切れ、動悸、焦燥の軽減目的にトフィソパム150mg/日、天候不良時に生じる倦怠感や頭痛に対しては五苓散エキス錠18錠/日を処方し治療を開始した。

治療開始から2週間後には労作時息切れが軽減し、動悸

や天候不良時に生じる倦怠感、頭痛が出現しなくなったことにより焦燥感も改善した。

以降は曇天時や雨天時に軽度の全身倦怠感を自覚する以外の問題なく生活できていたが、初診から8週間後の診察において「湿度が高い日や曇天～雨天時に頸部から胸部にかけて塊が存在するような感覚が出現し息苦しさを自覚する」との訴えが認められたことから半夏厚朴湯エキス錠12錠/日を処方へ追加した。

半夏厚朴湯を追加して1週間が経過した頃から上記症状は改善し、現在はその他の症状も再燃することなく経過している。

症例3 40歳 女性

【主 訴】 不安、不眠(入眠困難)

【病歴・経過】 X-9年に現夫と結婚し、専業主婦として出産、育児を経験しながら問題なく生活を送ることができていたが、新型コロナウイルスの流行に伴う緊急事態宣言により外出自粛を余儀なくされたX-1年4～5月頃よりテレビやネットニュースで目にする様々な情報に対して不安を覚えるようになった。

家事や育児に追われる中で不安感に対しては自力での対処を続けることができていたものの、X年1月に地域の子供会のオンライン会議開催を失念して参加し忘れてしまうという出来事があり、このことがきっかけで今まで以上に新型コロナウイルス関連の情報に過敏となって不安を自覚することが増え、夜になると考え事に苛まれて入眠困難を呈するようになったことから同月中に当院を初診。

インターネットなどで情報を収集し抗不安薬の依存性について懸念を呈していたことから半夏厚朴湯エキス錠12錠/日を処方開始したところ、服薬開始2週間目には入眠困難が改善し、X年3月の診察では様々な媒体で取り上げられる新型コロナウイルス関連の情報に触れて不安を感じる頻度が減っているという実感も得ていた。以降も服薬を継続する中で症状は改善し、X年8月の時点で「不安が出現することなく生活できるようになった」との発言を認めるに至った。

症例4 26歳 男性

【主 訴】 喉のつまり感、息苦しき、嘔気

【病歴・経過】 X-6年11月に不安、緊張が昂じた際に局限して生じる喉のつまり感、呼吸困難感、悪心を主訴とし

て近医心療内科クリニックを受診。パニック障害の診断でフルトプラゼパム2mg/日を処方されていたが、転居をきっかけとしてX-5年5月に当院へ転医となった。

初診時にSSRIを用いた治療を提案するも乗り気ではなかったことからロフラゼパム2mg/日を主剤とし、併せて不安時頓服としてアルプラゾラム0.4mgを処方し治療を継続した。

初診から半年ほどで頓服のアルプラゾラムを使用することがほとんどなくなり、以降はロフラゼパム2mg/日のみの服用で安定した経過をたどっていたが、X-2年9月に日常生活上のストレスが増強したことをきっかけとして喉のつまり感、呼吸困難感、悪心が増悪し遷延する状況が続いていたことから、同年10月より半夏厚朴湯エキス錠12錠/日を処方追加した。

半夏厚朴湯を追加して1ヵ月程度で喉のつまり感、呼吸困難感、悪心の出現頻度は3～4割程度まで減じ、以降も出現頻度は減少傾向にあったことからロフラゼパム2mg/日の処方を漸減中止とし半夏厚朴湯のみの処方とした。

X-1年7月に誘因なく顔面に局限した発汗と動悸、四肢の痺れ感が出現することがあり、この日を境に喉のつまり感と動悸が頻回に出現するようになった。病状に変化がみられなかったことから8月の診察時に半夏厚朴湯を中止し、柴朴湯エキス細粒7.5g/日へ変更して経過観察を行った。

処方変更後しばらくの間は月に1～2回の頻度で喉のつまり感と動悸を自覚する場面があったが発汗や四肢の痺れ感が再燃することなく、X年1～2月頃からは喉のつまり感と頻脈が出現することもなくなり、以降は現在に至るまで症状が再燃することなく経過している。

治療期間中、いずれの症例も薬剤に起因すると思われる副作用は認められなかった。

考 察

半夏厚朴湯の投与目標で最も代表的なものは咽中炙燔とされている。他にも半夏厚朴湯は不安や胃炎、咳嗽など幅広い症状に対して処方される漢方薬である。寺澤は半夏厚朴湯の使用目標を「体力中等度以下の人で、顔色がすぐれず、神経症的傾向があり、咽喉が塞がる感じ(いわゆるヒステリー球)を訴える場合に用いる。①気分が塞ぎ、不眠、動悸、精神不安などを訴える場合、②呼吸困難、咳嗽、胸痛などを伴う場合、③心窩部の振水音を伴う場合。」としている(図1)¹⁾。半夏厚朴湯をはじめとした漢方薬は抗不安

薬などでの治療に抵抗を示す患者に対して処方しやすい薬剤の一つである。今回、不安感や喉のつまり感を訴える患者に対して漢方薬を投与し著効した4症例を示した。報告した症例すべてにおいて、西洋薬での治療に対して何らかの抵抗感を示していた。

症例1ではパニック障害の不安症状や喉のつまり感、息苦しさがあったことから半夏厚朴湯での治療を行い、広場恐怖などについても効果を示した。パニック障害において、SSRIやベンゾジアゼピン系の薬剤が第一選択として用いられることが多い。その中で本症例において特筆すべきは、患者の意思を尊重しSSRIによる治療を行わずに半夏厚朴湯のみで奏効した点である。

図1 半夏厚朴湯の患者特徴

【半夏厚朴湯の使用目標】

体中中等度以下で顔色がすぐれず、神経症的傾向があり、咽喉が塞がる感じ(いわゆるヒステリー球)を訴える場合に用いる

- ① 気分が塞ぎ、不眠、動悸、精神不安などを訴える場合
- ② 呼吸困難、咳嗽、腹痛などを伴う場合
- ③ 心窩部の振水音を伴う場合

寺澤捷年: 症例から学ぶ和漢診療学. 医学書院, 第2版: 294, 1998より作成

図2 柴朴湯の処方構成



田中ら²⁾は、湿度が高い日に自覚された喉のつまった感じに対して、半夏厚朴湯および柴朴湯を処方し著効をみた例を報告している。症例2でも同様に天気に依存して現れる喉のつまり感に半夏厚朴湯が著効しており、気象病に対する漢方薬の有用性が示唆された。

症例3は昨今のコロナ禍において増えている「コロナ不安」の症例であり、喉のつまり感の主訴はなかったが不安症状に対して半夏厚朴湯が著効した。このことから半夏厚朴湯は必ずしも喉のつまり感がない症例に対しても、効果が期待できる方剤だと考えられる。また漢方薬は一般的に治療に時間がかかるため長期の服用が必要と思われる場合が多いが、今回報告したいずれの症例においても1ヵ月以内で効果が実感されていることは興味深い。

症例4では不安、喉のつまり感に対して半夏厚朴湯を処方し、一定の効果は認められたものの症状の増悪を認めたため、柴朴湯に変方し著効した。柴朴湯は抗不安作用³⁾や喉頭反射抑制作用⁴⁾を有する半夏厚朴湯と抗炎症作用⁵⁾、抗ストレス作用⁶⁾のある小柴胡湯の合方である(図2)。井出⁷⁾はストレス性の病態や慢性化した病態に対しては柴朴湯が半夏厚朴湯よりも効果が強いとしており、本症例のような半夏厚朴湯にて効果不十分な例に、柴朴湯は試みてもしも良い一手であると考えている。

結語

SSRIや抗不安薬などの向精神薬処方に対して忌避感を示す患者に対して、半夏厚朴湯や柴朴湯といった漢方薬は有用な選択肢の一つとなりうることを示唆された。

本症例で使用した漢方製剤は全てクラシエ製品を使用した。

【参考文献】

- 1) 寺澤捷年: 症例から学ぶ和漢診療学. 医学書院, 第2版: 294, 1998
- 2) 田中耕一郎 ほか: 東洋医学による慢性疼痛へのアプローチ～東洋医学における精神と身体, そして気質・気象との関係性～. Compr Med 15: 25-31, 2016
- 3) 栗原 久 ほか: 高架式十字迷路テストによる半夏厚朴湯の抗不安効果に関する検討. 神経精神薬理 17: 353-358, 1995
- 4) Sugaya A, et al.: Effect of Chinese Herbal Medicine, "Hange-Koboku-To" on Laryngeal Reflex of Cats and in other Pharmacological Tests. Planta Med 47: 59-62, 1983
- 5) 萩原幸夫: 和漢薬(漢方薬)の抗炎症作用. Prog Med. 12: 265-276, 1992
- 6) 雨谷 栄 ほか: 薬理・化学からみた小柴胡湯の全て(6)一中枢作用と生体恒常性維持一. 現代東洋医学 11: 471-477, 1990
- 7) 井出雅弘: 各科領域における心身症と漢方の有用性(8) 過換気症候群. 心身医療 2: 1600-1603, 1990